

## 第2節 研究セミナーの参加者のふり返り

### 1 実践事例発表者

島根県立生涯学習推進センター社会教育主事 山本 芳正

研究セミナーにおいて、島根県で実施している「ファシリテーター養成講座」の実践事例について発表する機会をいただいた。

最大の収穫は、発表を通してこの事業を見直すことができたことである。学習プログラムの意味と効果を再確認するとともに、課題を明確にすることにより今後の方向性が見えてきた。「誰にでもできるファシリテート力をつける」という明確で限定した学習プログラムについては、疑問や批判も受けたが、同時に、同セミナーへの参加者から、問い合わせや事業報告書を参考にしているという声を直接聞くことができ、事業の「波及効果」という成果についても知ることができた。

また、事例発表以外は一受講者としてセミナーの全日程に参加し、参加体験型学習に関する第一人者である調査研究委員会の委員による講義やワークショップ等から、参加体験型学習についての様々な考えや立場があることが分かり、配慮事項や限界をはじめとした課題について理解することができ、改めて、理論についての理解の必要性、よさや課題を理解しておくことの重要性を実感することができた。このように、参加体験型学習について濃密で充実した理論的、実践的内容を学んだりすることができたことも収穫であった。

私は今、参加体験型学習は手法であって目的ではない、この事業の目的は学びを通して住民自らが地域課題について考え解決していくことにより、「よりよい地域づくりを実現していくことである」「ファシリテーターの養成も効果的な手段の一つである」よって、「一人のカリスマ的なファシリテーターの存在よりも、地域で人々の間に主体的な学びを広げていくことができる多くの人材を養成していくことが現在の島根県には必要だ」と考えている。

今後は、「自分もできる。住民のために学びを創ってみたい・・・」という思いを少しでも多くの社会教育担当者をもつことができるように、当センター社会教育主事の資質と力量の向上を図るとともに、さらに充実した「ファシリテーター養成」を図っていきたい。

札幌市生涯学習センター事業課学習企画・視聴覚係 垂石 寛史

私は、今回のセミナー等を通して、参加体験型学習を研究・実践されている先生や先輩方と知り合えたことや、そのような方々を前に事例を発表するという貴重な経験をした。

また、委員会やセミナーはもとより、そのような方々と同じ時間を過ごし、参加体験型学習の手法の在り方について意見を交わしているときこそ、大きな学びがあったように思う。参加体験型学習とは、教え教わるの縦型の学びではなく、お互いが学び合う横型学習の手法であるならば、私たちも横のつながりで学び合ってはどうか。事例を知り情報を共有するだけでなく、事例をもとに多様な視点から議論する過程にこそ、次への事業のヒントが隠されていると思う。

参加体験型学習の手法は、参加し、体験し、その中で学び合うことが一番だと実感した1年であった。

青森県教育庁生涯学習課社会教育主事 佐藤 元伸

今回、社会教育実践研究センターで事例報告をするにあたり、社会教育主事として、これまでの取り組みを振り返り整理したことで、社会教育の奥深さを再認識することができた。

事例報告の中でも触れているが、現在、青森県内の各自治体は大変な苦境に立たされており、かねてから財政の基盤が脆弱であったことに加え、国からの交付金減額が大きな要因となり、県内にお金が回らなくなった。そしてこのことが、住民の心の中にまで不況風というか、心の過疎を進行させてしまっている。

このような現状を打破し、住民が安心して暮らせる地域づくりを進めていくためには、行政施策だけでは限界があり、住民の自助努力なくしては、光が差してこない。

「参加体験型学習」という手法には、住民の心の中に、地域活動へ「参加」して地域をなんとかしなければ、という思いをかき立てる力があると感じている。なぜならば、自己開示しながら相手のことも理解しようと努めることによって共感が生まれるからである。共感が生まれれば仲間ができ、一人一人の力は弱くても、仲間と手をつなぐことによって、克服は不可能と思えるような地域課題にも立ち向かっていけると感じている。

「学びから行動へ」は、青森県人権教育・学習推進協議会が発行したハンドブックのメインテーマであるが、学びの成果を死蔵させることなく、地域貢献活動として地域に還元していく動機づけを与えるのが「参加体験型学習」であると確信している。

岩手県立生涯学習推進センター生涯学習部 社会教育主事 西 崇

忘れもしない平成18年6月21日（水）。社研の担当職員の方から突然ファクシミリと委員の依頼の電話をいただき、参加体験型学習の手法に関する調査研究委員をお引き受けすることとなった。

第1回研究セミナーでは、「学校と地域の連携に関わる参加体験型学習」と題して、岩手県独自の教育振興運動の紹介も交えながら、地域連携の窓口となる教員研修の事例発表をさせていただき、前年度のアンケート結果を活かすため、ワークショップ（＝参加体験型学習）の手法を用い、自ら解決の方策を探るプログラム展開を中心に紹介した。

発表当日に向けてのレジューメ作成とアンケート等による事業分析を通して、当推進センターで実施した学習スタイル（地域連携の窓口となる教員の課題把握→課題にあった参加体験型学習の手法の選択→実施後の成果）の有効性を示すことができた。

また課題としては、参加体験型の理論研修と具体的な技法が学べる場の確立や、ファシリテーター養成の研修について検討していく必要性が確認された。

この結果を踏まえ、当推進センターでは、次年度に県内生涯学習関係職員を対象に「参加体験型学習専門研修講座」（定員30名）を実施する予定である。

高知県高岡郡越知町立越知小学校長、越知幼稚園長 山中 千枝子

社会教育における人権教育と参加体験型学習の在り方について、日頃から考えることが多かったことで、事例発表の機会をもたせていただけてよかった。

他の事業における参加体験型学習と人権教育における参加体験型学習は基本的に違うと考えている。多様な意見を出すために雰囲気づくりをし、双方向だけでなく全体へ広がりをもたせていく方法としては共通点があるが、「ワイワイ楽しくみんなの意見を・・・」だけでは、人権教育はあいまいに終わることが懸念される。

残念なことに、参加体験型学習という名で行われている人権学習で、「楽しいだけ、差別が現存していることだけをクローズアップさせただけ」の学習（研修）会に何度も出会った。テーマをしっかりと捉え、参加者が自分の心としっかり向き合うことができ、他の人と意見交換し、正しく認識できるプログラムを設定することが大切である。つまり、主催者の伝えたいことが参加者の知りたいことに転換していくプロセスが要求される。

今回の事例発表では、「どう伝えていくか」、そのための「プログラムをどう作っていくのか」、テーマにそって「どこをどう参加型にしていくのか」等について話をさせてもらった。また、2回目のセミナーでは、人権に配慮したアイスブレイキングを行った。出会いからはじまる人権、テーマにそったアイスブレイキングやアクティビティ等、楽しく参加しながら自己改革できる人権教育における参加体験型学習をつくっていきたいし、広めていきたいと考えている。

## 2 受講者

### 【第1回研究セミナーから】

仁淀川町立大崎小学校 土居 茂則

学習者が、楽しく、気軽に、主体的に参加するためには、それが可能な課題や細かなプログラムを複数立案しておくこと。そのよさとして、参加者個々人の気付きや体験が大切にされ、また多面的な見方を引き出すのに有効であること。さらに、ファシリテーターの役割や人間性、力量の如何が、学習会の成否を決定づけること等、まさに「参加体験型学習会」を体験しながら、「参加体験型学習」への理解を深めることができた。これからの学習会・研修会の立案や運営に活かしていきたい。

横浜市教育委員会生涯学習課 柿沼 陽子

参加体験型学習の難しさを再確認した反面、ひとつひとつのアクティビティの意味づけや活用方法などを具体的に体験・理解することができました。ファシリテーター（コーディネーター）の養成に取り組んでいる自治体・施設も多く、その後の活用・活躍の場、しくみづくりは同じ悩みとしました。多くの事例報告を聞いて今後の参考になりました。

これまで受身的でしかとらえることができなかった課題に対しても、自分のものとして受け止め主体的に解決していこうという姿勢を促す上で、参加体験型学習は有効だと思いました。しかし、安易に取り入れることなく、参加体験型学習の必要性をしっかりと検証していく必要があると感じました。

## 【第2回研究セミナーから】

同じ職場の先輩から「楽しくて、ためになった」という感想をきいて、研修に申し込みました。参加体験型学習については、既に自己流のものを講座に取り入れています。が、「自己流」の裏づけとなる「基本」をマスターしなければ！と常日頃から思っていました。しかし、その期待は裏切られることとなりました。

この3日間、理屈よりも、とにかく参加体験型学習をハードに体験した私は、疲労の中で、「参加体験型学習に決まりきったカタチなんてないんだ・・・」という結論にたどりつきました。参加体験型学習を通して、学習者同士がうちとけあって、主体的に頭をフル回転させてひたすら学ぶ・・・この過程こそが、参加体験型学習なんだろうなと思いました。

というわけで、すっかり自分を解放した私は、「型にはまらない発想・発言」を今まで以上に心がけました。グループのみなさんが優しくフォローしてくださり、リラックスした気分で参加することができ、受講者の方たちとも交流を深めることができました。この講習で得たことを、今後の「自己流」参加体験型学習の内容に活かしていけたら！と思いました。講師の方々の「ファシリテーター」としての素晴らしさにも、受講者のみなさんが目を奪われていたようです。これを機会に、また近々、上野の森を訪れてしまうかもしれません。

このセミナーに参加して、講師の方々の参加体験型学習に対する熱い思いが強く伝わりました。それと共にファシリテーターとしての資質・能力が重要であることを感じました。自分にとって、体験した様々なアクティビティは、これからの事業を行う上での引き出しとしてとても有難かったです。

また、効果的に使うために、どんな時にどのような場面でどんな対象に対して行うのか考えることが改めて必要であることがわかりました。質的評価の重要性を感じながらも、量的な評価に縛られがちであった私にとって、事業改善のための具体的な評価の例をあげていただいたことは、まさに目から鱗でした。講習後、新鮮に仕事を見つめることができるのも、講師・事例発表者・参加者・社研の皆様のおかげです。